

政治学グランドセオリーの新展開

石 積 勝 (共同研究代表、文責)

1 神島政治元理表と本稿の視点

本稿は国際経営研究所プロジェクト「政治学グランドセオリーの新展開」の報告書の性格をもっている。同プロジェクトは経営学部専任教員、石積勝と、同じく経営学部非常勤講師、大森美紀彦がその中心になって過去数年間にわたり進めてきているものである。すでに同プロジェクトに関連していくつかの問題提起的論文を発表しているが、本稿では日本の近・現代の包括的理解のための神島政治元理表を使った試論を提示することにする。

プロジェクト「政治学グランドセオリーの新展開」の中核には政治学者故神島二郎の手になる未完成の「政治元理表」が位置する。我々（石積及び大森）はこの元理表に政治学グランドセオリーのブレーク・スルーの可能性を見ている。元理表は政治学に留まらず社会科学一般に大きな影響を与える可能性を秘めたものであると我々は確信している。今後の我々の学的営みは、この残された政治元理表を進化・発展させ、その具体的展開を示すことにその中心を置くことになる。神島の政治元理表は政治学徒神島の集大成であり、その全体像を語ることは並大抵なことではない。逆に言えばそこにはじつに広大な、ほぼ無限ともいえる可能性の地平線が広がっている。

ここではひとつの元理表利用の具体例、その端緒について論じようとする。この元理表を使った場合の日本社会の分析の試みである。日本の明治以降のマクロの歴史展開に関してである。明治以降の歴史展開を大づかみに把握し、そ

の特徴を元理表にそって考察し、日本社会の現在と今後を理解する上での、ひとつのヒントとしたいというのが筆者（石積）の意図である。精緻な実証性を伴う論述というよりは、あくまで新たな視点の提供が主眼であることは指摘しておきたい。神島元理表による近・現代日本の理解の試みの前に、その神島の政治元理表そのものを、あらためて図1として次に提示しておく。

図1 神島二郎 政治元理表：

(「国際政治再考に向けて」 P120 PROJECT PAPER NO.21/2010 神奈川大学 国際経営研究所) 他に既に紹介

政治元理表

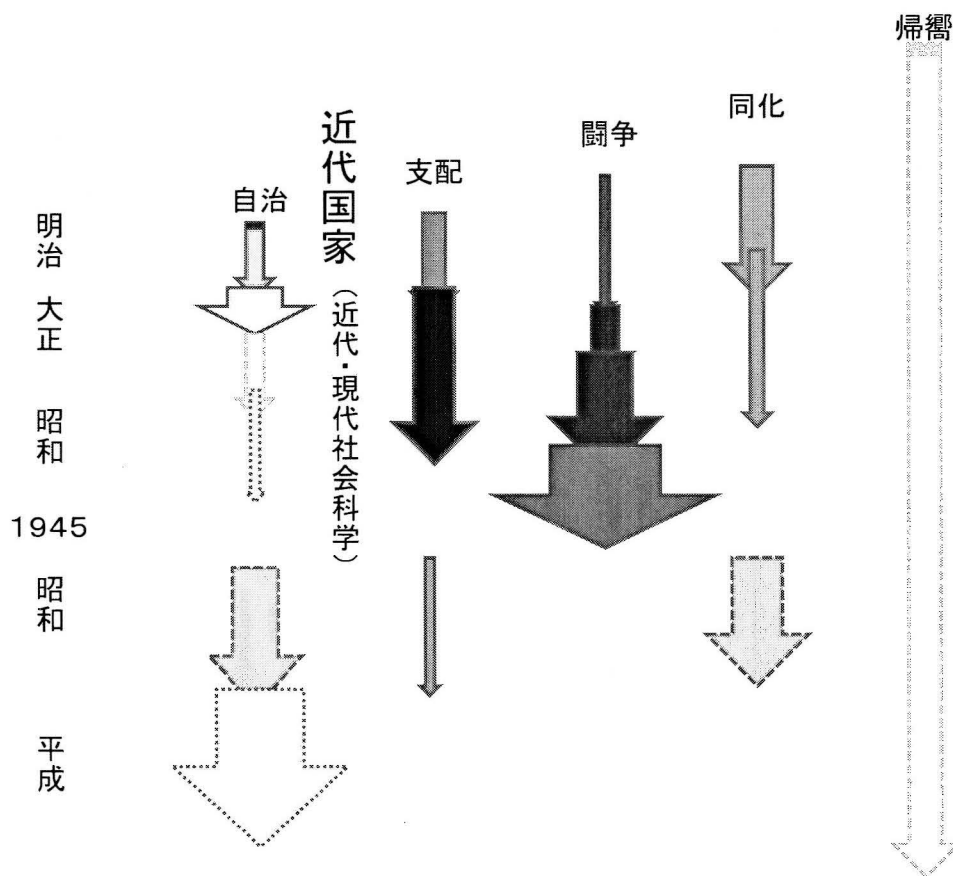
Table of Political Elements

元理 element 範疇 category	帰嚮 Involution	エロス Eros	カルマ Karma	同化 Assimilation	互換 Reciprocity	自治 Autonomy	法 Rule of law	知己 Menschenkenntnis	闘争 Struggle	支配 Hegemony
権力 Power(gambit)	人心 current mood	愛 love	業 karma	文明 civilization	交換 exchange	世論 public opinion	法 law	出会い encounter as chance	真鋭 mana	武力 armed force
体制 Regime(order)	まつろふ・しらす pietas & regno	族制 relative system	縁 pratyasampada	内外華夷 center & periphery	コムニタス communitas	連合参加 consociation	原告・被告 accuser & accused	二人関係 Zweisamkeit	敵味方 friend & enemy	支配従属 domination & subjugation
制度 Institution	よさし trust	家族なり教養 family-Bildung	道理 dharma	教義 doctrine	伝統 tradition	契約 contract	法治国 Rechts-staat	たのみたのまれる confidence	治 judgment	組織の強制 organization as coercion
運動 Activity	もののあわれ Japanese boredom	反抗期 rebellious age harassment	達観 satyagraha	造反 zao fan	革新 innovation	異議 protestation	市民オンブズマン democratic control of public administration	不信 distrust	乱 conflict	抵抗 resistance
指導 Leadership	受容 capacity(network)	和 Wahlverwandtschaft	行 yoga	超贈与 potlatch	志 ambition	代表 representation	弁論 legal debate	人間洞察 insight into personality	カリスマ charisma	統率 capability (commandership)
変動 Change	なる becoming	一家離散 broken up family into singles	輪廻 panta rhei	情報革命 information revolution	世直し restoration	俱分進化 dualistic evolution	政治の透明化 turn to a transparent politics	祝祭 festival(orgie)	興亡 rise & fall	暴力革命 violent revolution
価値 Value	清明 serenite (innocency)	幸福 happiness	平安 santi	豊かさ affluence	共生 millet (milla)	自由・平等・友愛 liberty/equality/fraternity	公正 fairness	信義 faith	いのち life(human rights)	正義 justice
責任 Responsibility	懺悔・自決 confession/suicide	謝罪 apology	諦観 resignation	私財盡(井戸端) public service	自戒 self-discipline	相互決定 mutual decision	成敗 jugement	慎独 self-carefulness	人民裁判 people's court	戦争裁判 war tribunal
財源 Finance	奉納 offer to deity	共食 communion	布施 offering	貢物 tribute	異人歓待 hospitality	課税 approved taxation	自弁 pay one's own expense	提供 presentation		
基底 Base	馴化強制 convergent constraint	家族強制 family constraint	無化強制 de-imaging constraint	無為強制 inactive constraint	無辺強制 borderless constraint	遍路旅宿強制 hijra(mobility) constraint	情報公開強制 information-disclosure constraint	青春体験強制 youth experience constraint	物化強制 reificative constraint	異化強制 matsyanyaya constraint

2 政治元理表を使った近・現代日本の理解

以下、図2では、政治元理表を使い日本政治・日本社会の大づかみな明治以降の変遷についてのひとつの解釈を示す。この図2は筆者のオリジナルであり実験的試みである。今後の精緻な研究が要請されるものであるが、新しい視点の提供という点で、また無限の可能性を持つ神島政治学グランドセオリーの具体的適用という点で実験的に提示する。

図2（筆者作成・未発表）



上記、図2 を以下箇条書き的に解説する

- ① 扱う時代は明治以降であり、その対象は総体としての日本社会・日本政治ということになる。光を当てているその対象はそれぞれの時代のエトスとも言えようし、それぞれの時代に支配的に機能した政治の元理でもある。それを図示したものである。

- ② 神島の元理表は政治現象の森羅万象を扱う、まさしく政治の一般理論であるから、日本も含まれるが、ありとあらゆる社会（小社会から大社会まで）を対象とする。しかもどの社会においてもすべての元理（10の元理）が強弱の違いこそあれ存在するというのが神島の見立てである。つまりそれぞれの社会、それぞれの時代において、それぞれの元理が比較相対的に強く前面に出てくることになる。＜図2＞においては、右から帰嚮・同化・闘争・支配・自治と並ぶが、この元理以外の元理が日本社会・日本政治にないということではない。主たる元理としてこの5つの元理を筆者（石積）が取り上げているのである。
- ③ <明治初期> 明治においての主導的な元理はまずは「同化」であった。「文明開化」「鹿鳴館」という政治的スローガンは象徴的にこの時代のエトスを表しているが、この時代、日本社会は相対的に進んだ（と考えられた）近代西洋社会に「同化」することに大きなエネルギーを発揮する。ここではまだ「闘争」の元理は頭をもたげていない。西洋近代のひとつの決定的な側面である「支配」の元理は比較的に初期から登場するが、それが大きく前面に出てくるのは日本がいわゆる列強諸国に加わって植民地獲得競争に本格的に参入してからということになる。
- ④ <大正・昭和> 1945年に向かい、まずは「同化」のエネルギーに陰りが見え、日本主義が登場する。戦前の「近代の超克」論議はそのひとつのピークを示すことがらである。一方、力をつけた近代日本は、近代の本質のひとつである「支配」の元理をおもにアジアを舞台に全面開花させることになり、それが既存の国際秩序と衝突する段になって、「支配」よりさらに先鋭であり、かつ情緒的な「闘争」の元理に最終的にはその主導的な役割をゆずることになる。これが第二次大戦直前の日本のエトスとなる。「自治」の元理は明治以来さまざまに様々な論者によって喧伝されたが、そのひとつの開花が「大正デモクラシー」ということになる。この自治の元理の政治的要素は、昭和に入り急速にしぼみ、敗戦前においてはほとんど消滅することになる。
- ⑤ <1945年以降> 敗戦後の日本はまた再び「同化」の道を歩むことになる。この場合の「同化」は欧米というよりは米国である。明治のスローガンは

「脱亜入欧」ということであつたが、敗戦後の政治スローガンは「アメリカナイゼーション」であつた。いずれにせよ「同化」のエトスが強力に再び登場する。ただしその「同化」の外枠は＜図2＞においては点線で示されている。すでに西洋文明、あるいはアメリカ文明に対して部分的ながら懷疑がそこには芽生えているからである。「闘争」の元理はすっかり後背に退くが、近代国家の道を再び歩みだし「ジャパン・アズ・NO1」とまで言われるほどの経済的成功を収めるに伴い、近代国家のひとつの側面である「支配」の元理はまた再び頭をもたげてくることになる。ここではしかし憲法9条に象徴されるような平和主義が一定の影響力を保持することになる。そして「支配」の元理は、こと国際関係においては戦前のそれとは大きく異なりかなり強力なタガをはめられることになる。「戦後民主主義」といわれるように「自治」の元理は日本の歴史上かつてなかったほどにその重要性を主張することになる。大きく広く展開されることになる自治元理に基づいた戦後民主主義ではあるが、どの程度まで日本に住む人々によって内面化されているかといえは疑問がある。その意味で昭和の時代においても平成の時代においても「自治」の元理はその外枠を点線で示すのが適当であろう。日本社会における「自治」の元理の脆弱性がそこに表現されている。

- ⑥ 上記③から⑤までで触れることが無かつた「帰嚮」の元理であるが、これは戦前・戦後を通じて日本社会の通奏低音のように常に一定の影響力を示してきた。もちろん時には声高に、時にはほとんど目立たぬ形で。この「帰嚮」の元理は日本のただ今現在においてどのようなポジションを占めているのだろうか。この文章は2011年7月に書かれているが、この3・11東日本大震災から4カ月を経た状況で、どのように機能しているであろうか。「ガンバロー日本」「日本を見直す」などというスローガンとともに日本回帰の流れは確実にある。その点も注目せざるを得ない。

3 政治学グランド・セオリーの新展開

上記＜図2＞では＜図1＞で提示した神島の政治元理表を使いながら、近代

日本の社会を大づかみに論じてみた。＜図2＞で示したのは日本政治史でもあるが日本精神史でもある。それは日本総体の性格、その時代的変遷でもあるが、同時に具体的な個々の政治現象（本稿では全く触れていないが）についてのひとつのアプローチである。

＜図2＞は日本を、日本の総体を分析対象にして神島政治学の可能性の一端を示しているが、当然ながら神島の政治学一般理論は他の分析対象に対しても有効に機能できるものである。少なくとも筆者はそうのように考えている。その分析対象は必ずしも大きな政治現象である必要はない。この元理表は政治現象の大小を問わず、あらゆる政治現象を分析のまな板に乗せることを前提としている。ある政治現象を分析するにあたり10個の全ての元理を動員する必要もない。対象とする＜現象＞により、その分析に必要な特に重要な元理があるだろう。

＜図2＞で行ったように、元理表は恣意的に使えばよいのではないかと考える。もちろんそこには使用する側の判断と勘がある。そのことについてもそれはそれとして認めるべきというのが筆者の立場である。政治現象の分析にはそもそも価値判断が常にまわりついているのである。社会現象の分析にまわりつく価値判断はそれ自身必ずしも否定的なことではないというのが筆者の立場である。

もうひとつ述べておかなければならない点は原理と元理の違いである。神島の中では原理は複数の元理の組み合わせで成立するものである。何々主義というのは政治原理と親和性を持つが、元理はむしろ政治現象の＜要素＞ということになる。そして同時に元理はそうした政治現象の分析の道具立てのパーツということになる。例えば民主主義というのはひとつの＜原理＞だが、その原理を構成する要素には自治をはじめとしていくつかの元理が関わり、その運動や組織・制度を理解するには様々な範疇を動員する必要がある。つまり元理表はマックス・ウェーバーなどがいう理念型（イデアル・チップス）ではない。ダイナミック（動的）に政治現象を理解しようというものである。その政治現象を分解し、再構成し連動・統合させようとするものである。

したがって神島の元理表はじつは我々の社会科学的認識枠組みの再構築である。新たな政治原理の提示ということではなく、その原理構築の基礎ともなる

政治現象の把握の仕方そのものについて、新しい手だてを提供しようとするものである。ここに神島元理表を「新しい政治学グランドセオリー」と呼ぶ理由がある。この元理表が政治学一般理論の、さらにいえば社会科学一般理論の新しい地平線を切り拓くものではないかというのが筆者たちの考えである。10数年前にこの元理表を神島自身から提示され、その後この元理表の深化・具体的適用をことあるたびに試みてきているが、必ずしも十分に成功しているわけではない。ただ神島自身がそう考えていたように我々（石積・大森）もまた、この元理表の深化と展開は我々のライフワークに値するものであると思っている。その思いはますます強くなる。